

中長期目標 (学校ビジョン)			夢や希望に向かい 自分らしく輝いて たくましく生きる力を育む ～「〇〇したい」と主体的に生きる姿を求めて～		今年度の 重点目標	・一人一人の可能性を広げる主体的で多様な学びの推進 ・社会と主体的に関わる自信と勇気を取り戻す豊かな体験の創造 ・「生きたい」を保障する教育活動・環境の整備 ・主体的な生き方を支える支援体制、連携の強化		
年 度 当 初 ()月								
評価項目		評価の具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
各 学 部 の 取 組	小学部	児童が願いを抱き、人との関わりを広げながら意欲的に学ぶ授業づくり	・児童の実態に大きな幅があり、重度の児童も多い。個々の児童の実態やニーズを適切に把握するために、保護者や関係機関との情報共有を継続的に行っていく必要がある。 ・教育支援計画・指導計画の目標検討会やグループ学習の計画についてグループで話し合うことで、児童の実態に合わせた目標設定や支援を行うことができるが増えてきている。 ・単一会・重複会を定期的に行い、適宜学部全体で情報を共有し、学部の意見を集約することで、学部全体で児童を支援する意識が高まってきている。	・適切な目標設定や支援を行うことで、児童が人との関わりを広げながら、意欲的に学ぶ授業づくりを行っている。	・保護者や関係機関との連携を生かしながら、児童の「〇〇したい」という願いを大切にした授業づくりを行うために、児童の実態、目標、支援等についてグループで話し合いを行い、計画や実践に生かし、授業改善をしていく。 ・教育支援計画・指導計画の検討会を計画的に行い、子どもたちの実態や学習のねらいに応じて様々なグループ学習を展開し、児童が人との関わりを広げながら学ぶことができるよう支援を工夫する。 ・日頃から担任・副担任で子どもたちの実態や授業に関する情報交換を行うとともに、単一会・重複会で、職員間の連携を図り学部全体で児童を支援する体制づくりを行う。 ・学部で授業を見合い学ぶ機会や、学校全体の研修で学んだ授業づくりの工夫を学部で話し合う機会を設け、授業づくりに生かすようにする。			
	中学部	生徒が自分の思いを言える、伝えられる、叶えられる環境づくりと授業づくり	・各教科の理解度や障がいの程度など、生徒の実態差が大きい。単一学級は不登校を経験している生徒が増加している。重複学級は、障がいの重度化と共に高度な医療的ケアを要する生徒が増えている。 ・生徒理解のために単一会や重複会を行っているが、授業予定や連絡事項について話し合われることが多く、授業を通した生徒の変容や各授業の評価・改善について話し合われることが少ない。 ・教科指導や自立活動の専門性向上、効果的なICT活用、実態に応じた教材・教具の活用など授業力向上に向けた努力が必要である。 ・進路学習について、様々な状況に応じて学習内容を考え、計画的に実施することが必要である。	・職員、生徒の8割以上が生徒自身から思いを発信したり、自ら行動したりすることが増えてきたと感じている。(単一) ・職員、保護者の7割以上が、生徒の実態や生活年齢に応じた学習や適切な集団学習の工夫ができたと感じている。(重複)	・日々の実践につながる学部研修を行う。また、定期的に単一会や重複会を実施するとともに、単重チームを中心として生徒の変容などを話し合う時間を設定する。 ・生徒が意見を言えたり意思表示しやすかったりする環境設定や雰囲気づくり、実態に応じた適切な教材を準備できるよう関係職員で随時確認を行う。 ・生徒がすべきことを自分で考えられるよう、指導と支援、受容と許容のバランスに留意する。 ・集団学習に関わる職員が生徒の目標を共有できるよう、事前の確認を徹底する。 ・生徒一人一人の病気や障がいに応じた適切な支援を行うために、保護者・関係機関との連携を深める。			
	高等部	夢や自分らしさの実現にむけて、生徒が主体的に自分の力を発揮できる授業づくり	・学部会、単一会、重複会の中で、生徒についての情報共有が行われており、日々の生徒との関わりに生かすことができている。生徒のニーズや目標、支援の確認や授業改善の視点を持った話し合いを継続的に行っていく必要がある。 ・外部講師との学習について、ねらいやバランス、教科とのかかわりを考えながら昨年度見直しを行った。3年間でめざす生徒の姿や学びの連続性について確認しながら見直しを持って学習を計画していく必要がある。	・生徒の夢や自分らしさの実現にむけて、授業や体験活動等の工夫・改善を行い、生徒が主体的に自分の力を発揮できる授業づくりや支援を行っている。	・生徒が自分の思いを伝えたり、自分の目標に向かって主体的に学習に取り組んだりすることができるよう、雰囲気づくりや学習環境の整備に努める。 ・生徒の実態やニーズに応じた適切な支援や教材の準備をすることができるよう、生徒の目標や支援方法について随時確認する機会を設ける。 ・めざす生徒の姿や3年間の学びの連続性について確認し、3年間を見通しながら学習を計画するよう努める。 ・授業改善の視点を持った話し合いを定期的に行うようにする。			
一人一人の可能性を広げる主体的で	教務部	カリキュラムマネジメントの充実	・目標検討会により、児童生徒の実態について目標の修正や共通理解ができ始めている。個別的教育支援計画、個別の指導計画、年間指導計画で検討された個別の目標を指導計画等に繋ぎ、授業に生かす必要がある。 ・重複学級においては、国語、算数・数学の年間指導計画が無く、今年度作成予定である。	・各種指導計画が適切に記入されることによって、PDCAサイクルが機能している。 ・重複学級の国語、算数・数学の年間指導計画が作成されている。	・個別的教育支援計画、個別の指導計画、年間指導計画等の各種計画が前年度の評価を踏まえ適切に記入されているか、今年度の記入は適切か等定期的な声掛けとチェックを行う。 ・教員の負担を考え、作成の見通しが持てるような枠組みを整え提案する。			
	授業づくり部	・主体的・対話的で深い学びを実現する授業づくり ・多様な学びを保障する効果的なICT機器活用	・昨年度、教科会と連携した授業実践の持ち寄りによる学び合いを行い、学習の流れとめあての明確化を進めた。T1の7割以上が実践し、指導や支援の見通し、めあてと対応した振り返りにつながりつつある。 ・昨年度、アンケートを基に、ICTミニ研修や端末活用による多様な学びについての授業づくり日研修等を企画した。教職員の情報活用能力向上につながるよう、引き続き企画の工夫が求められる。 ・児童生徒主体の多様な学びの実現に向け、実践を通した学び合いの継続とともに、全校での共通理解や連携、外部講師による指導助言の必要性が高まっている。	・研究日、授業づくり日での実践を通した学び合いが授業づくりの工夫・改善につながっている。(職員アンケート:7割) ・ICT研修が授業実践や児童生徒理解等に活かしている。(職員アンケート:7割)	・研究説明会で提示用カードを活用した学習の流れとめあての明確化、めあてと対応した振り返りについての共通理解を図る。 ・授業づくり日研修を病弱教育、肢体不自由教育CFやまなびのプロジェクト等と連携して企画し、年間の見通しを示す。 ・各ツールの活用による実態把握や目標設定に向け、研究日を活用し、演習を取り入れたミニ研修を設定する。 ・単一、重複会や職員アンケートによる声を研究日やICT研修等に反映させ、外部講師との連携を図る。 ・動画保存フォルダやClassroomを活用し、学び合いの情報共有を図る。			

多様な学びの推進	自立活動部	主体的な学びを実現する授業のサポート	- 実態把握として鳥養版Co-MaMeや自立活動チェックリストを活用しているが、実施時期や実施方法が違う。また、自立活動部員の中にCo-MaMeの経験者が少ないため、年度当初からアセスメントの声かけができておらず、サポート体制が不十分である。 - 研修動画の保存先がバラバラで、動画を再度見ようと思っても、なかなか見つからないときがある。 - 自立活動室の安全点検は、物品の数が多すぎるため、出し入れが大変な物品について点検していない月もある。また、部員も少なくなり、安全点検の実施自体が難しくなっている。 - スヌーズレン室について、教職員からの要望を踏まえ、季節に応じて飾りを変えている。ただ、担当任せになっており、他の部員が同じように仕事ができるとは考えにくい。	- 実態把握から目標設定までの手続きの仕方について、教員に情報を提供し、必要に応じて相談にも対応する。 - 研修動画の保存場所が整理されており、見たい人が見ることができる。 - 自立活動室の安全点検を例年より少ない部員でできるよう、新しい仕組みを考え、実施している。 - スヌーズレン室の物品や飾りについて、自立活動部員の中でおおまかに把握している。	- 専門性の高い教員と連携し、実態把握から目標設定までの手続きについて研修を実施する。また、確実に実態把握や目標設定ができるよう、実施時期の前に呼びかけや説明を行う。さらに、年度が変わっても、持続的な仕組みとなるよう、おおまかな年間スケジュールを作成する。(11月まで) - 介助職員も見やすくするため、iPadからでも見られるように保存先を考える。研修動画の保存場所を掲示板を通して伝える。 - 使用頻度の多い物品を中心に毎月点検し、使用頻度の低い物品は、半年に1回確実に点検する。 - 季節の掲示物を蓄積する。物品の配置について、自立活動部内で共通理解する機会を設定する。(6～7月)		
	豊かな体験部	- 自分らしさや夢を実現する力を育てる豊かな体験活動の実施 - 保護者(地域)と協力した教育活動の推進	- キャリア教育部と分かれたことで仕事の振り分けが発生した。 - 委員会だけであった本校に児童生徒会が発足して会長選挙なども行うようになったが、生徒数減少などで存続の方法も考えていかなければならない。 - わくわくフェスタの実施について部員が中心となっていて活動していたが、今年度は担当者を振り分けできないために各学部から代表者を出してもらうことにした。学部間の連絡調整をしっかりとする必要がある。 - 居住地校交流について保護者に通信で啓発してきたが通信を作るのは人数的に難しい。	- 児童生徒会の運営を通して、児童・生徒に学級や学部を解いた集団活動のよさを感じられる経験をする。 - 生徒の生活の延長線にある日常での体験活動が充実するとともに、機会を捉えて非日常感のある貴重体験の機会も充実している。	- 児生会の活躍の機会を多く設定し、リーダー育成の好循環な流れを作る。 - キャリア教育部との内容のすみ分けを考えながら、協力できるところでは情報の共有を図りそれぞれの部の視点から体験活動を生活に生かしていく。 - わくわくフェスタや作品展等の機会を通じて、本校の教育活動を広く外部に広報する。		
	キャリア教育部	- 自分らしさや夢を実現するキャリア教育・人権教育の推進 - 進路についての情報発信、フォローアップの充実	- キャリア教育と人権教育について全体計画を提案、全校でそれをもとに取り組みを進めている。キャリアパスポートや人権教育年間指導計画を作成している。 「進路の手引き」の家庭配布など進路情報の発信に努めている。	- 教職員がキャリアパスポートを日々の学習活動に取り入れたり、人権教育の視点を意識した授業づくりに取り組んでいる。 - 校内での掲示や通信などを活用して、進路情報を発信している。	- 学級担任に対して、キャリアパスポートと人権教育年間指導計画の作成や活用状況をアンケートで集約。それを元にキャリア教育部で評価を行う。 - 電子掲示板などを活用して教職員に対して情報提供や啓発活動を行う。 - 校内に進路掲示板のコーナーをつくり、情報発信を行う。 「進路だより」を発行する。 - 保護者との座談会を行い、保護者の思いを聞きながら、進路情報の発信を行う。 - 就労促進セミナー、福祉セミナーへの参加案内を行う。		
「生きたい」を保障する教育活動・環境の整備	保健安全部	- 教職員の連携による安全な医療的ケア、個別の緊急時対応の見直し、安全な給食の提供、病院との連携 - 健康教育(食育・保健教育)、性に関する指導の充実 - 事故防止・再発防止の徹底	- ヒヤリハットレベル0～1の報告件数の増加(令和6年度:58件)した。、看護師間での報告・連絡・相談がうまく機能しており、レベル0の事例共有を徹底していた。 - 教職員間のレベル0～1の報告件数も増加し、レベル2が2件、レベル3以上は発生しなかった。・報告を上げることへの抵抗感を感じていると回答した教職員もいる。 - 年度当初のケアトークや個々の医療的ケアに応じた研修の開催を行っている。 - 個々の指示書に沿った緊急時マニュアルを作成し対応を行っている。 - 教職員アンケートの「給食を活用した指導を計画的に実施できたか」の問いに対して肯定的な回答が65%(令和5年度)→71%(令和6年度)と向上が見られている。 - けんこうルームの活用等、児童生徒の実態に応じた	- ヒヤリハット事例がより報告しやすい環境になる。 - ヒヤリハットの共有により、未然の事故防止につながられる。 - ヒヤリハット事例について、教員がDBに上げることができる。 - 児童生徒の学習への積極的な参加や学校生活を通して、個々の目標を達成できるよう、成長や発達を最大限に促すことができる。 - 教職員アンケートの「給食を活用した指導を計画的に実施できたか」の問いに対して肯定的な回答が75%以上ある。	- 未然の事故防止につながる、ヒヤリハットの共有方法や報告しやすいシステムの検討を行う。(Googleフォームの活用、DBの上げ方の周知等) - 医療的ケアが安全に実施できるよう、多職種と連携し校内研修を企画し実施していく。 - 状況共有のためのツールを工夫し、児童生徒の情報を共有し医療的ケアの充実を図る。 - 献立に関するひとことメッセージや、食育動画など給食指導のための資料提供の充実を図る。 - 食育関連行事(食育月間・給食週間)を実施する。 - 委員会活動(教育企画部)と連携した指導の充実を図る。		
	環境安全部	- 教職員の連携による安全な学校生活、個別の緊急時対応の見直し - 災害に備えた防災体制の整備	- 教職員の防犯体制や災害時の避難について意識はあるが、避難方法については周知が足りない部分もある。 - 子どもたちが安心して避難できるよう防災ウィークを活用して、常日頃から各児童生徒個別の避難方法や介助人数等を意識し、訓練・校内研修を行っている必要がある。	- 防犯体制および災害時の避難経路や避難場所、救急体制が確立している。 - 防災ウィークを活用し、教職員・児童生徒が災害時の避難体制について日頃から訓練、研修を行う。 - 安全点検を行い、校舎をより安全安心して学習できる場所にするため事務室と連携し、改善・修繕を行う。	- 防災ウィークで避難について意識を高めたり、外部機関と連携をとって学校全体での各種訓練を行ったりしながら、避難方法を全体で共有する。 - 児童生徒の個別の避難方法や介助人数等の情報を共有し避難訓練の充実を生かす。 - 安全点検であがってきた項目を生かし、事務室と連携しながら設備の充実を図る。		
	事務部	- 防災物品の整備、情報共有 - 防犯対策、施設案内の整備	- 昨年度まで防災用物品の整備をすすめてきた。物品は充実したが、取り出しやすさ、消費期限の確認、使用方法の表示など検討が必要。 - 東玄関(事務室前)の表示の見直しができておらず、看護専門学校と間違えて侵入する方が後を絶たない。	- 保管物品の種類や使用方法について、職員に情報共有されている。倉庫内の物品が探しやすい状態になっている。 - 東玄関の施設案内、表示が整備されている。	- 保管されている物品の使用を確認して、掲示板等を用いて情報発信する。 - 倉庫内で物品の内容が一目でわかるように表示する。使用期限や消費期限がある物品は表示を行う。保健安全部、環境安全部とも情報共有を行う。 - 東玄関の案内表示について、初めて訪れた人でもわかるような標示方法を検討する。		

主体的な生き方を支える 支援体制・連携の強化	支援部	校内支援、教育相談体制(外部との連携)の強化、支援ツールの活用 ・生徒指導の充実 ・センター的機能の充実 ・ほっとルームの効果的な活用 ・支援ツールの活用	・校内支援に関する各種会議、委員会等の内容の共通理解と活用が十分ではないケースがあった。各学部へのサポート体制と連携については模索している段階であり、個々の困り感に組織的に取り組めるよう体制を整備していく必要がある。 ・関係機関との連携について全職員に対して説明の場を設けているが、教職員に十分に周知されていない。 ・生徒指導ミーティングにSC、SSWが参加することで、様々な視点から支援の在り方を検討することができている。SSWが交替した。	・支援に関する会議実施後、参加者全員が具体的にに取り組むことがわかり、児童生徒の生活に変化が見られている。 ・アンケートやアプリ等を活用しながら生徒の心の不調、いじめ等を早期に発見し、各学部やSC、SSWと連携して情報共有、早期対応ができている。 ・相談支援について、校内、校外の人的資源を活用し各ケースに対応できている。心の問題についてはCo-MaMeを活用した実態把握ができている。	/会議の記録方法や記録用紙を見直すことで、実際の支援につながりやすくする。 ・相談のあったケースについては支援部を中心に複数で検討する場を設ける。必要に応じて外部専門家に相談する。 ・計画している学校生活アンケートや生徒指導ミーティングを確実に実施して、担任、各学部やSC、SSWと連携して情報共有する。 ・地域支援においてはケースの内容に応じてアセスメントツールを活用し、それを踏まえた助言を行う。			
---------------------------	-----	---	---	---	---	--	--	--

評価基準 A:十分達成 B概ね達成 C:変化の兆し D:まだ不十分 E:目標・方策の見直し
[100%] [80%程度] [60%程度] [40%程度] [30%以下]